

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆書	隷書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
協	キョウ かなう								
叶	キョウ かなう								
協	キョウ かなう おびやかす あわせる								
卒	ソツ しもべ おわる ついに にわかに								
卒									
卒									
卓	タク シツ つくくえ すぐれる								
卓									
卓									
単	タン ゼン ひとつ ひとえ								
単									
単									

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考

【協】説文解字の大徐本の或体に「叶」の字体がある。大徐本と段注本では或体と古文の字体が逆。似た意味の字に「協」がある。大徐本では「協」を「眾之同和也」とし、「協」を「同心之和」とする。五経文字では「協」を誰とはせず、「心部亦有協字與此同並訓和案」としている。

【卒】南北朝期に「卒」から異体字の「𠂔」ができる過程がよくわかる。

【卓】石門頌では伸ばす線がまだ1本に統一されていない。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期								
南	ナン ナン みなみ		甲骨		睡虎地秦簡		米部		馬王堆			集字聖教序	鄭長猷造像	九成宮		序	王勃詩序
			甲骨		包山楚簡		古文		馬王堆								
			甲骨		散氏盤		米部		敦煌漢簡								
			甲骨		大孟鼎		米部		敦煌漢簡								
							米部		敦煌漢簡								
卑	ヒ いやしい いやしむ いやしめる ひくい		金文		侯馬盟書		ナ部		馬王堆			黄庭経	元彦墓誌	孔子廟堂碑	九経・雜辨部		王勃詩序
卑	ヒ いやしい いやしむ いやしめる ひくい		金文		侯馬盟書		ナ部		馬王堆								豊替指歸
			散氏盤		侯馬盟書		ナ部		尹宙碑								
					郭店楚簡												
博	ハク バク ひろい		金文		説文	十部		馬王堆		書譜	集字聖教序	鄭義下碑	伊闕仏龕碑	干祿字書			王勃詩序
			金文		敦煌漢簡							十部					
			金文		五経												
			金文		後家純消息往來												

【卑】金文では「田+支」だが、説文解字の大徐本では「甲+又」になっている。「支」の上部を「田」と合体させて「甲」にしてしまったのだろう。大徐本にも段注本に角があるが、金文にも隸書にも角はないので、角をつけるのは説文解字の様式なのかもしれない。この角を字画として書いたものは説

文以降もなかったが、角を字画としてつけたのが康熙字典。九経字樣は「甲+又」としているが甲の下部の縦線をまっすぐに書いている。

【博】右上の点はつけないことの方が多くようだ。説文篆文を見ても、どうしても点をつけなければならない字体には見え

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん ころこ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
南	南	南	南	南			南	南	南	南	南	南
粘葉本朗詠	節用	17		坊っちゃん								南 中・台・香
元永本古今	再版農業全書	古文										
元永本古今		古文										
卑	卑	卑	卑	卑			卑	卑	卑	卑	卑	卑
藤原朝隆	謹身往來	16		坊っちゃん								卑 九経(訛) 中国・台湾
佚名白詩	節用											卑 香港
博	博	博	博	博			博	博	博	博	博	博
花園天皇	謹身往來	10		坊っちゃん								博 干祿(通) 中国
												博 台湾
												博 香港

ない。干祿字書の字体を五経文字で訂正している。五経文字の拓本と版本で偏の形が異なる。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆書	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
ト	ボク ホク うらなう うらなひ								
占	セン しめる うらなう								
卦	カケ うらなう うらなひ								
卯	ボウ ウ								
卯									
印	イン しるし しるす								

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
ト	ト	ト	ト				ト					ト 中・台・香
		ト										
		ト										
		ト										
		ト										
占	占	占	占	占			占	占	占			占 中・台・香
		占										
		占										
		占										
卦	卦	卦	卦	卦			卦					卦 中・台・香
		卦										
卯	卯	卯	卯	卯	卯	卯	卯					卯 中国・台湾
		卯										
		卯										
		卯										
印	印	印	印	印			印	印	印	印		印 中国
		印										
		印										
		印										

【印】行書一般的な筆順は偏の横線2本を書き「レ」を書く。をつけることが多い。  
したがって偏の縦線は下に突き抜けられない画数は3画。康熙字典、文部省活字、当用漢字表は偏の縦線が下に出ているが、当用漢字字体表では出ているとも出ていないともいえるような微妙な形。一画目は左から右に書く。平安以降は各なし点

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
危	キ あぶない あやうい あやぶむ 教6 常①		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	杜家立成
危			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	豊替指歸
			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	
却	キヤク しりぞく しりぞける かえって 常①		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	王勃詩序
卻	②		𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	
			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	
即	ソク ショク つく すなわち 常①	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	王勃詩序
卽	人③	𠂔	𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	
		𠂔	𠂔						
		𠂔	𠂔						
卵	ラン たまご 教6 常①		𠂔	𠂔	𠂔			𠂔	家録萬象名義
			𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	類聚古集④
卸	シヤ おろし おろす 常①		𠂔				𠂔	𠂔	王勃詩序
							𠂔	𠂔	五経・日部

【却】「卸」の異体字で五経文字や康熙字典では俗字とされているがその出現は早く、漢代にまでさかのぼる。文部省活字も俗字を採用している。旁を「𠂔」と誤ったものが多い。  
【即】「卽」は漢代の隸省/隸変だ。康熙字典には「卽今作卽」とある。文部省活字もこの字体を採用している。漱石は

正(統)字体と通(用)字体の折衷のような字体を書いている。  
【卵】説文解字の大徐本に古文はなく、段注本にのみある。段注本の古文の字体は九経字様にあり「説文」とあるので、オリジナルの説文解字にはあったのが唐時代に欠落したのだろう。段注本の古文は望山楚簡や馬王堆2と字体が合致する。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん ころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
危	危	危	危	危	危		危	危	危	危		危
危	危			危	危							危
却	却	却	却	却	却		却	却	却	却		却
												却
即	即	即	即	即	即		即	即	即	即		即
												即
卵	卵	卵	卵	卵	卵		卵	卵	卵	卵		卵
												卵
卸	卸	卸	卸	卸	卸		卸	卸	卸	卸		卸
												卸

漱石の『坊っちゃん』には「卵」が4回使われているが、すべて傍の点を書いていない。  
【卸】干禄字書では、偏を「垂」としたものを〈正〉とし、「缶」とするものを〈通〉としているが、五経文字では、「卸」を正字として修正している。驚くべきことに漱石は干禄字書

に掲載のものと同じ2種の字体を書いている。漱石は干禄字書を持っていたのかもしれない。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期				
卿	キョウ ケイ くげ きみ 人①		説文・卯部	馬王堆	乙瑛碑	十七帖	鄭義下碑	九成宮	干祿・序	王勃詩序			
卿			段注・卯部	居延漢簡	史晨前碑		王羲之草書	泉男生墓誌	五經・卯(派文)	龔賢指歸			
卿				居延漢簡	張遷碑			李壽墓誌	五經・卯(石經)				
厄	ヤク わざわい くるしむ 常①		説文・尸部				集字聖教序	度人經	五經・尸部(派文)	寶應經斷簡			
厚	コウ あつい 教5常①		説文・早部	馬王堆	史晨前碑	十七帖	集字聖教序	元祐墓誌	温彦博碑	杜家立成			
			居延漢簡	西狹頌			王遷墓誌	伊闕仏龕碑		杜家立成			
			説文・古文	銀雀山竹簡	燕平石經			于志寧碑		篆隸萬象名義			
厘	リン 常①									千祿字書			
塵	テン みせ やしき ②		説文・广部				孫述浮圖銘	陸紹墓誌	五經・广部	龔賢指歸			
釐	リ おさめる あらためる たまる やもめ ②		説文・里部				王舍人碑	宋甯祖石經帖	集字聖教序	檀資墓誌	雁塔聖教序	干祿字書	篆隸萬象名義

【卿】説文解字の大徐本には「從卯」とあるが、段注本には「從卯」とある。大徐本や段注本より古い五経文字の「説文」の字体には「𠂔」の中に点がある。もしかしら古い説文には「𠂔」の中に点があったのかもしれない。  
【厄】1981年(昭和56年)に常用漢字表に追加された。五経文字

では「尸」部に分類されており、「尸」に従う字体を「説文」としているが、この字体は大徐本にも段注本にもない。古い説文解字には「尸」に従う字が載っていたのかもしれない。  
【厘】中国では「塵」や「釐」の略字として書かれてきた字体。日本では「塵」や「釐」とは別字種として、長さや割合や重

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
卿	卿	卿	卿		卿		卿					卿 中国・台湾
卿	卿				卿							卿 香港
					卿							
厄	厄	厄	厄	厄			厄					厄 中・台・香
	厄			厄								
厚	厚	厚	厚	厚			厚	厚	厚	厚	厚	厚 中・台・香
				厚								
				厚								
厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘 千祿(通) 中・台・香
				厘								
				厘								
				厘								
				厘								
				厘								
				厘								
釐	釐	釐	釐	釐	釐	釐	釐	釐	釐	釐	釐	釐 千祿(俗) 中・台・香
				釐								

さの単位として用いられる。王羲之の宋揚祖石經帖で草書の「釐」は「厘」に見える。北魏では「塵」の字種に「厘」を書いたり、「土+厘」を書いたりしている。干祿字書では「厘」を「塵」の「通」とし、「釐」を別にあげている。康熙字典は「厘」の項に「俗作釐省非」とある。漢字要覧では「物ノ数量

ヲ記スル時ニ限りテ、別體ヲ用ルモ妨ナシ」とする。明治の漢字は「厘」を「釐」の許容とする。陸軍幼年学校用事便覧は「質ハ別字」とする。中国では「厘」と「釐」は「厘」に統合されている。